＜ソヴィエトの養魚事情＞

池中養魚の発展の結果と課題

ソヴィエト農業省大衆誌「養魚と漁業」1964年No. 3 より

著　者　カ・ババヤン

訳　者　高　昭　宏

漁業関係の従業員にとって，1963年は大きな成果をおさめた年であった。すなわち，漁業は期限前に漁獲計画を達成し，しかも計画を400万ツェントネルも上まわったのである。1963年に得た魚類，クジラ類，海獣類，その他水産生産物は4,700万ツェントネルで，これは1950年の場合の約3倍にあたっている。

国営養魚場の従業員は，1963年に227,400ツェントネルの商品魚を生産した。これは1962年の場合より4,600ツェントネル，率にして25%上まわるものである。ウクライナ共和国およびモルダヴィア共和国の漁業事業場では，養魚の生産計画を達成した。多くの国営養魚場は，科学の成果の上にたって，仕事の上ですぐれた結果を得ることができた。たとえば漁業事業場＜ドンルィブコンビナート＞では，面積900㌶の池から，1㌶当たり11,400ツェントネルの魚類を獲得した。またポタペンコ氏の班の池（面積53㌶）からは，1㌶当たり24,400ツェントネル（1㌶当り6,700ツェントネルの天然魚が含まれている）の魚類を獲得した。漁業事業場＜ベレジャヌイ＞では，勤務員は，池1㌶当たり21,300ツェントネルの生産高をあげた。リャザーニン地方の漁業事業場＜パーラ＞の池（養育面積620㌶）からは，1㌶当り13,600ツェントルの魚類が得られた。ここで獲れたのは全部2才のコイで，1尾の平均体重は496㌘であった。コイ1ツェントネル当りの生産費は60ルーブルで，これは初めの計画より3ルーブル安くついたものである。チェルニシェバ氏の班は，彼の事業場の第2号池で，1㌶当り19,900ツェントネルのコイ（商品魚の平均体重は514㌘）を獲得した。ソロブツォバ氏の班の第4号池では，1㌶当り20,400ツェントネルのコイ（商品魚の平均体重550㌘）を得た。そして結局，この事業場は211,000ルーブルの利益を得た。モスクワ地方の漁業事業場＜オセンカ＞では，養魚池の漁業生産高は，1㌶当り15,300ツェントネルであった。＜ベロルスク＞の養魚池1㌶当り平均漁業生産高は4,700ツェントネルであった。また漁業事業場＜ベロエ＞の養魚池（面積807㌶）から，6,449ツ

ェントネルの魚類が得られた。ベリヤコバ氏の班の池（面積76㌶）からは，1㌶当り11,800ツェントネルの商品魚が得られた。漁業事業場＜ボルマ＞の養魚池（面積152㌶）では，コルズナ氏の班は12,700ツェントネルの魚類を獲得した。漁業事業場＜ビチェーニ＞の漁業生産高は，1㌶当り7,500ツェントネル（商品用のコイの平均体重585㌘）であった。

1963年にソ連邦の漁業事業場全体で17,310万尾の稚魚（コイやその他の魚）を養育した（これは1962年の場合より1,660万尾多い）。当才魚の飼育に関するすぐれた成果が，次の事業場で得られた。すなわち，モスクワ地方の＜レーニンスク＞では，1㌶当り16.2ツェントネルの稚魚，バロネジスク地方の＜レボリューツァ＞では面積21㌶の池に19.8ツェントネルの稚魚，タムボフスク地方の＜ドウブレチエ＞では1㌶当り18.4ツェントネルの稚魚，クルスク地方の＜プログレス＞では1㌶当り20.8ツェントネルの稚魚，ウクライナの＜ドンルィブコンビナート＞では1㌶当り平均20ツェントネルの稚魚，ノビコバ氏の班では40㌶の池に28ツェントネルの稚魚を，それぞれ養育した。

しかし，全体的にみれば，ソヴィエトの池中養魚計画は遂行されなかった。つまり，各共和国がすべて首尾よく養魚計画を遂行したわけではなく，とくにロシヤ連邦の養魚計画の遂行状況はひどく悪かった。計画未達成の原因は，事業場の大部分は，池中養魚の集約化水準がまだ低く，たいていの場合，必要な資金が保障されていないことである。

先輩たちによって達成された成果の基礎には，養魚業の集約化水準の引上げに努めた日常の地道な仕事がある。先輩たちは，有機肥料や無機肥料を池に投入したり，質のよい稚魚を飼育したりしてきたのである。

漁業事業場＜ベロエ＞では野菜をコイの餌料に利用して1㌶当り約8ツェントネルの生産高をあげた。これによって，餌料が節約できるばかりでなく，魚類をより安く養育できるようになった。＜ベロエ＞の場長ベルヤコフ氏は，1㌶当り12ツェントネルの魚類を獲得した（池の面積76㌶）。この事業場では野菜44㌧が用意されて餌料に供された。コトビーチャ氏の班では池1㌶当り11.5ツェントネルの魚類（1尾の平均体重510㌘）が得られ，このために86㌧の野菜が使われた，これによって，この事業場をはじめとして，その他の事業場は，魚類1ツェントネル当たりの生産費を40ルーブル80コペイカまで下げることができた。

ロシヤ・ソヴィエト連邦社会主義共和国では，商品魚の養魚計画は遂行されなかった。これは主として，中央生産管理局下の漁業事業場の事業が不成績だったからである。この管理局下の事業場の漁業生産高は，1㌶当り8.1ツェントネルであった。これは共和国全体の平均漁業生産高よりいちぢるしく高かったが，1961年のこの事業場の生産高よりは低かった（1961年にモスクワ地方の漁業事業場は，1㌶当り10ツェントネル以上の漁業生産高をあげた）。クルスク地方，バロネジスク地方，ベロロドスク地方の漁業事業場の漁業生産高は低かったが，ウラゾフスク，コビレンカ，ドン・リュートリッチ，パレボイ，ボリソフスクの各事業場では，1㌶当り3—4ツェントネルの魚類を獲得した。中央生産管理局下の6漁業事業場（パーラ，プログレス，ワリューチキ，オクトヤブリ，オセンカ，グジェルカ）は，この管区の池の総面

積の23%，養育した魚類は管区全体の40%を占めた。

北西地方生産管理局，北カフカスク生産管理局，ボルジスカムスク生産管理局によって，全共和国の池のほぼ半分（9,400㌶）が利用されている。そしてこの地方の漁業生産高は1㌶当り2.3—4ツェントネルの間を上下している。ラトビスク共和国の漁業事業場の生産高はきわめて低く，1㌶当り3.3ツェントネル，リトフスク共和国では1㌶当り3.4ツェントネルであった。このため魚類の生産費が増大した。これらの共和国では，近年養魚業はあらゆる面で状態が悪化した。

具体的な実情に即応して，1963年と今年（1964年），各漁業事業場では人工餌料の欠陥について研究をすすめている。こういう条件のもとで，人工餌料の合理的な利用はとくに大切なことである。しかし現在，餌料は無統制に消費されている。漁業事業場＜ザゴルスク＞では，餌料率は7.4%，＜レーニンスク＞でのそれは約10%であった。こういう餌料率の事業場はざらにあるのである。餌料を使いすぎると，ただ養魚場の餌料を確保できなくなるばかりでなく，餌料に対する支出が総支出の50—70%を占めるようなことになり，生産費をぐんと高めてしまう。各事業場および各班が天然餌料をいかに広く利用するかという課題がある。高い漁業生産高をあげている事業場は，一般的に生産費が低い。漁業事業場＜パーラ＞では，魚類1ツェントネル当りの生産費は58ルーブル70コペイカであり，＜レーニンスク＞の場合は111ルーブル40コペイカであった。したがって養魚の発展をかちとる闘いは，もっともきびしい節約，つまり生産費の低下と結びつけて行なわなければならない。

大部分の共和国では，養魚業の発展がおくれていることの原因を明らかにし，あらゆる指標にもとずいて，生産の改善措置を具体的に企画する必要があると私たちは考えている。稚魚の養育に関して特別の配慮がはらわれるべきである。

ロシヤ・ソヴィエト連邦社会主義共和国カザフスカヤ共和国，ウズベクスカヤ共和国では，稚魚の飼育に関する試験が組織的に行なわれている。その結果は次のとおりである。まず第1に漁業事業場の養魚池の面積がせまいこと，第2に現在ある池が十分に利用されていないことがあげられている。ここで，ロシヤ・ソヴィエト連邦社会主義共和国の，稚魚の養育に関する1963年の若干の結果を述べる。ここでは2,061㌶の養魚池で，6,600万尾の稚魚（1㌶当り3,200尾）が養育され，漁業生産高は1㌶当り6.8ツェントネルに達した。ところが先輩たちは，1㌶当り6—7万尾（10—15ツェントネル）を得ていたのである。

ソヴィエト共産党中央委員会10月総会は，化学工業の大々的な発展計画を作成した。とくに無機肥料の生産を強化して，養魚業の生産高の向上をはかる新しい道を明示している。今後，養魚業の集約化の強化は，次の方向で行なう必要があると私たちは考えている。すなわち，無機肥料と有機肥料を正しく利用して，池の漁業生産高の増強をはかること，また，魚類の成長をうながし餌の消化を助ける化学肥料を利用して，餌料支出を減少させること，さらに池で養育されている魚類を保護するために化学薬品を使用したり，余分な雑草を取りのぞくために薬品を利用することである。

次に，養魚施設の建設が遅々として進んでいないことを指摘しないわけにはいかない。1963年の養魚施設に対する投資計画は

78%しか実施されていない。これらの措置が実施されると，池中魚の生産増大に対する有利な条件ができるだろう。1964年には，養魚場の従業員は国家の計画（1963年より113千ツエントネル多い，340千ツエントネルの魚類を生産する計画）を達成するために十分な配慮をはらう必要がある。私たちは，生産高を高める方策を入念に検討し，先輩の経験（生産面積，稚魚，餌料を効率的に利用している）に大いに学ぶ義務がある。1964年には，私たちは無機肥料と有機肥料を広く利用して，池の生産高の増加に注意をむける必要がある。漁業団体は資金投下の知識を身につけたり，養魚場の人員，施設，機械を補充したり，仕事のテンポや仕事の量を調節したり，養魚の過程を総合的に機械化したりする必要がある。

ソヴィエト共産党中央委員会10月総会および11月総会は次のことを決定した。すなわち，「今後の農業の発展，すなわち畑作，畜産の生産高の増大は，農業の集約化を基礎にして達成されるだろう」と。このことは，わが国における池中養魚の将来の発展にも直接むすびつくものである。集約化の水準を高めることと，池の面積を拡張すること，この二つを密接に結合させる必要がある。一定の面積から，最少の費用で最大の生産高をあげること——これが私たちの課題であり，養魚業の基本的な方針である。1964年には，養魚計画未達成の共和国や事業場が一つもないことを祈る。

（余市漁業問題研究会）

к，баваян

итоги и задачи развития прудовог рыбоводства

（рыбоводство и рыболовство. 1964. №3）

（訳者あとがき）

ソヴィエトでは沼，池，川などを利用して養魚が盛んに行なわれている。そして最少の費用で最大の利益を得るために，研究機関と事業が一体となって，生物学的研究経済学的研究をすすめている。ソヴィエトの養魚の実情と問題の一端を知るべく，カ・ババヤン氏の記事を紹介した。ソヴィエトでは，養魚の収益性を高めるために，たゆまぬ努力を重ねていることが分り参考になろう。